

スポーツ競技におけるフェアネスと参入障壁

慶應義塾大学 中島研究会

小田倉朋也 権名津里紗 高橋由希 武方浩太郎 千島慧佑

1 序論

今年の夏、ロンドンオリンピックは 204 の国と地域が参加し、盛況のうちに閉幕した。日本は過去最多 38 個のメダルを獲得し、アメリカと中国もそれぞれ 104 個、88 個と多数のメダルを獲得した。その一方で、メダル獲得数ゼロの国は全体の 6 割近くにも及ぶ。国の貧富を表す際に用いられるジニ係数をメダル数で計算すると 85.5/100 という驚くべき数値を示した。またバスケットボールや卓球のように特定の国によるメダルの独占が生じている事実もある。こうした背景に各スポーツで何らかの参入障壁が生じているのではないか、フェアネスが保たれていないのではないかといった疑問が浮かんでくる。参加国数の多さを存在意義として謳うオリンピックにとっては決して望ましい状況とはいえないだろう。そこで様々なスポーツを分析し、フェアネスと参入障壁の視点から考察を加えたい。

2 本論

2.1 スポーツの参入障壁

我々は、スポーツの参入障壁を考える上で、オリンピックのメダルが一つの指標になるのではないかと考えた。様々な国がメダルを獲得している競技は参入障壁が低く、世界各国で行われていると考えられ、逆にわずかな国しかメダルを獲得していない競技では参入障壁が高いということが予想される。そこで、オリンピックにおけるメダル獲得国を分析した。ただし、冬季オリンピックに関しては競技の性質上、明らかに参入障壁が高いと思われるので除外した。

2.2 オリンピック競技におけるメダル獲得国数の変遷

図 1 はカー、ビーチバレー、卓球、テニス、アーチェリー、バドミントン、サッカー、ホッケー、バレーボール、バスケットボール、ハンドボール、シンクロイストスイミング、水泳、セーリング、レスリング、サイクリング、フェンシング、ホクシング、柔道、ボート、テコンドー、陸上競技、重量挙げ、射撃、体操、馬術の 26 競技に関するデータである。1964 年の東京大会から 2012 年のロンドン大会までの 13 大会におけるメダル獲得国の変遷で、東京大会でメダルを獲得した国に新規メダル獲得国の数を足した数値を記録したものである。図からも読み取れるように、競技が始まってからの時間が長ければ長いほど、より多くの国がメダルを獲得できていることがわかる。しかしながら、競技によってはグラフの傾斜がなだらかで、あまりメダル獲得国が増えていないものもある。特に卓球、バレーボール、バスケットボール、シンクロイストスイミング、ビーチバレー、バドミントンにはその傾向が顕著に見られる。

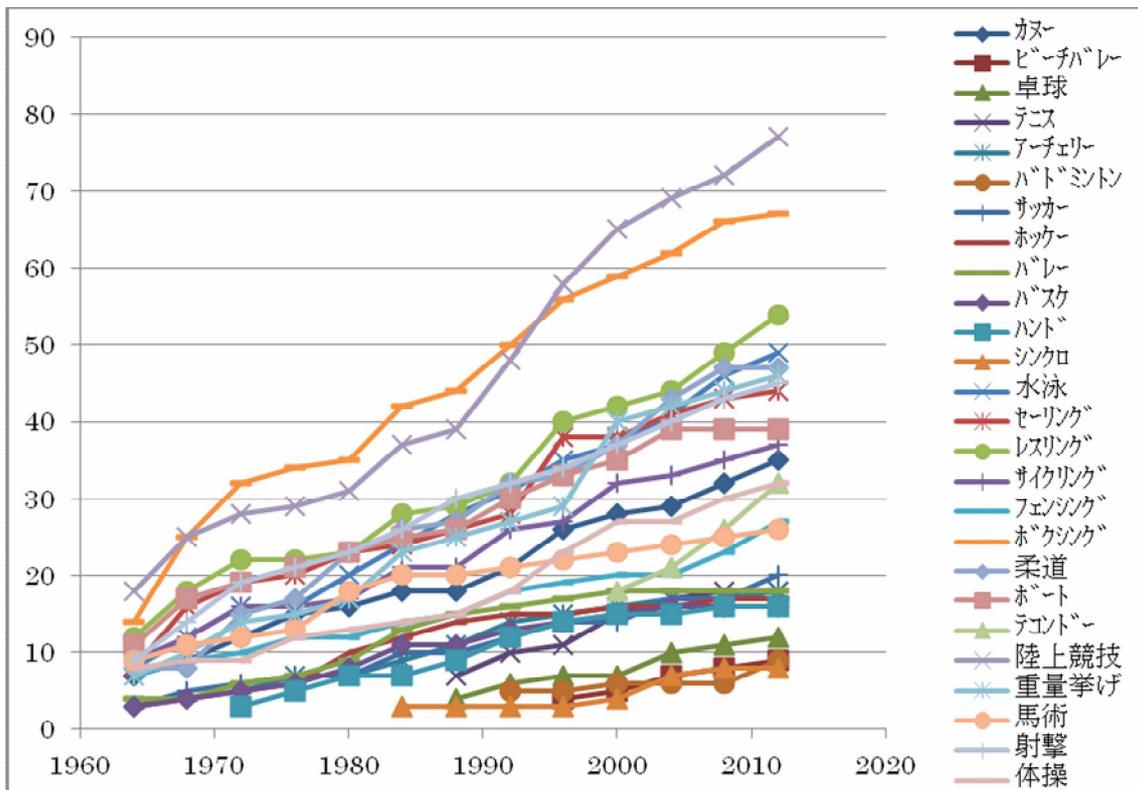


図1 マダル獲得国の変遷

2.3 数値分析

2.2 で示したように、競技ごとにマダル獲得国数に偏りが見られる。これに関して詳細な分析を加えたい。図2は図1で示した数値を整理したグラフである。これは前大会比の伸び率を平均したものに、競技ごとのマダル獲得国数が全体のマダル獲得国数に占める割合をかけた数値をグラフ化している。ウェイトを乗ずる理由は、種目数が少ない競技で獲得国数が1ヶ国増えた効果を過大評価しないためである。(例 3→6 は 100%増だが、10→15 は 50%増)

図2には様々な傾向が見られ、6点の特徴があると思われる。

- ①身体能力の高さを競う競技は数値が高い
 - ②格闘技は数値が高い
 - ③球技は数値が低い
 - ④形の美しさを競う競技は数値が低い
 - ⑤選手寿命が長い競技は数値が高い
 - ⑥立体的な(身長が必要とされる)競技は数値が低い
- 以上の6点である。

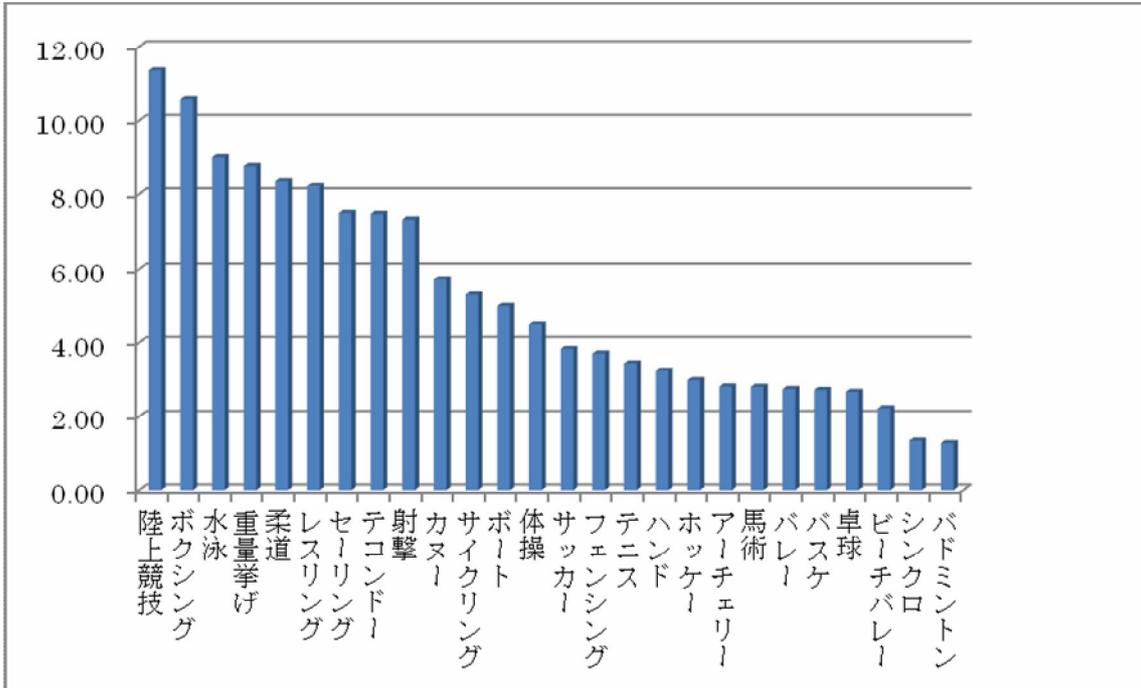


図2 前大会比伸び率×(各競技のメダル獲得国数/メダル獲得国数の総和)

2.4 考察

2.3 で挙げた 6 点について、それぞれ考察を加えたい。

① 身体能力の高さを競う競技は数値が高い

陸上競技、水泳、重量挙げについては、身体能力の高さを競う競技と言えるのではないだろうか。1対1の競技ではないという点で、相手にいかに勝つかという技術よりも、自らの身体能力をどこまで高めることができるのかが競技の結果に強く関わっていると言える。こういった競技は国の強さというよりも、個人がどれほど強いかが重要である。例えば陸上のジャマイカ代表ウサイン・ボルトや水泳のアメリカ代表マイケル・フェルプスのように、突出した能力を持った個人がメダルを獲得することがあり、より多くの国がメダルを獲得することができる競技であると考えられる。

② 格闘技は数値が高い

ボクシング、柔道、レスリング、テコンドーのような格闘技は総じて数値が高いことが見て取れる。こうした格闘技は体重によって細かく階級が分けられているということがあり種目数も多く、メダルの数も多い。そのためより多くの国にメダル獲得のチャンスがある。また、体重による階級の分類は身体能力や身長などの個人の固有値を公平にするため、より均等にメダル獲得のチャンスが与えられていると言える。黒人や白人に比べ、バネが弱く筋肉量が少ないと言われる黄色人種にもメダリストが多いこともこれを裏付ける事実であろう。

③ 球技は数値が低い

サッカー、テニス、ハンドボール、ホッケー、バレーボール、バスケットボール、ビーチバレー、バドミントンといった球技

は軒並み数値が低い。ボールを使う競技ではより長い時間ボールに接することで、技術を向上させることができる。そのため、幼少期からその競技をしていることが求められる。それには、その国に文化的に深く競技が根付いている必要がある。そのため、突出した能力を持った選手が生まれることはあっても国のチームとしてメダルをとることは難しく、そういった点で参入障壁は高いということが言える。

④形の美しさを競う競技は数値が低い

体操、シンクロナイズトスイミングは形の美しさを得点として競う競技である。こうした競技の特徴は第三者の視点が必要不可欠な点にある。他の競技では、自主練習で個人の能力を上げることも可能であろう。しかしながら、形の美しさをつくる能力は第三者の目がなければ向上させることができない。優れた競技者を育てるためには優れた指導者が必要だと考えれば、これも参入障壁となるのではないだろうか。

⑤選手寿命が長い競技は数値が高い

セリグ、射撃といった競技は選手寿命が長いことが特徴として挙げられる。選手寿命が長いということは、それだけ、どの国においても選手の層が厚くなるためメダルの獲得は容易になると考えられる。

⑥立体的な(身長が必要とされる)競技は数値が低い

サッカーとバレーボール、バスケットボールを比べた際に、球技であり団体競技であるという点で似通っているにも関わらず、かなり数値に違いが出ていることがわかる。これはサッカーがバレーボールとバスケットボールに比べて平面的なスポーツであることが理由の一つだろう。バレーボール、バスケットボールの選手の平均身長を見れば、身長が必要不可欠な競技であることは自明であり、国ごとに平均身長が違うことを考えれば多くの国がメダルを獲得するのは難しいのではないだろうか。

3 結論

本論で述べた通り、競技ごとに参入障壁の高さに違いが生じていることがわかる。オリンピック開催の意義を深める意味からも、IOCには参入障壁を下げるよう各競技団体に働きかけを行なっていくことが求められる。しかし、競技の性質によっては参入障壁を下げるのが難しいケースもあろう。この場合は参入障壁を超えるコストを支払う必要があるのではないだろうか。実際に、日本でも文部科学省がマルチスポーツ事業として2億円を超える予算を組み、NTC(ナショナルトレーニングセンター)を設立するといった投資をした結果、ロンドンオリンピックで過去最多のメダルを獲得するという結果に至っていることからコストを費やすことは必要不可欠であると言える。

<資料・文献>

国際オリンピック委員会 HP <http://www.olympic.org/>

チーム「ニッポン」マルチスポーツ事業 文部科学省

http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/07110104/007/004.pdf

IOC (1996)「The IOC official Olympic companion」Brassey's Sports